

ヨーロッパアルプス回顧録

藤井 論

この2月9日、長年続けているテニスのプレー中にアキレス腱を断裂し、手術で入院した。当分は登山ができなくなってしまうことになりショックだった。個人山行を含めほとんど毎週のように山へ登っていた者にとっては相当につらい。ホームページでクラブの山行写真を見ると楽しそうで羨ましくなる。悔しいのでこんな時期にしかできないことはないかと考えた。山の本を読む、山の写真を整理する、山の記録を整理する、etc. その中でまず今までの登山のメモや写真を、電子化してまとめることを始めた。特に若いころの記録はワープロのない青焼きの時代で、手書きの記録とフィルムの写真しか残っていない。これらを電子ファイル化してまとめてみることにした。

その一つが当時27歳の時に行ったヨーロッパアルプスの記録である。38年前にはワープロはなく、半透明な紙に手書きし青焼きしたものしかない。これをパソコンで打ち直し、写真とスケッチはスキャナーから読み取った。

仕事は駆け出しでまだ給料が少なかったので3年計画で旅費を作った。そして1975年7月25日～8月9日の16日間、アルパインツアーのフリーコースで参加した。安いインド航空の南回りで、羽田空港（成田はまだなかった）を出発し香港、バンコック、カルカッタ、カイロ経由でジュネーブに着く長旅となった。シャモニーから先は団体と分かれてフリーとなり単独行動をとった。そしてシャモニーでモンブラン、ツェルマットでマッターホルン、グリンデルワルトでユングフラウの登頂を目指した。以下、ヨーロッパアルプス登山の体験を数回に分けて紹介したい。

第1回 モンブラン登頂とグランドジョラス

7月26日（土） 晴時々曇

日本から南回りで丸1日かけてやっとスイスに入った。ジュネーブ空港より居眠りしながら2時間のバスに揺られて、10時にフランスのシャモニーに到着する。バスを降りると、街中が西洋人だらけの光景に夢の中のような不思議な気持ちになる。ここで飛行機を共にした仲間たちと別れ、いよいよ一人だけの行動が始まった。まずはテントを張るべく、駅の西側15分のところにあるRosieres キャンプ場へ行く。キャンプ場の管理人に英語を話してもわからず、身振り手振りでスッタモンダする。キャンプ場は、バカンスで来たヨーロッパ人たちでテント村ができている。フランス、ドイツ人、イタリア人、オランダ人、イギリス人そして日本人など。実にさまざまな人種の集まりである。町へ出かけて装備の不足品のポリタン、キャンドル、石油（当時はラジウスだった）、メタ、および食糧品を買い、さっそく明日からの山行の準備を始めた。

キャンプ場に5日前から来ていたという小暮さんの話によると、昨日まで3日連続で天気が悪く、今日になって回復してきたから、また2、3日天気が続くだろうとのこと。裏返せばそのあとは崩れるということだ。崩れる前に登らないと登頂はできない。ヨーロッパに入って早々だが、ぼやぼやしているわけには行かない。モンブランへ登るチャンスは“今でしょう”。日本での登山と同じように、テントの中で手際よく明日の出発に備えて準備をし終わる。

夕暮れがせまる頃、キャンプ場の芝生にねっ転びながら、キャンプ場で知り合った日本人の高荷氏と二人で、夕暮れに染まるモンブラン山頂とかっこよくそそりたつドリユを目の前に仰ぎながら、うまいワインを飲みヨーロッパアルプスの懐に入った実感を味わった。日が暮れて床に入ると、旅の疲れのせいかすぐ寝てしまった。

7月27日(日) 晴

今日はモンブランへ出発する日で、4時半に起床すると外はもう明るい。人通りのほとんどないシャモニーの町を朝一番の Les Houches 行きのバスで出発する。Les Houches でしばらく待っていると、60人ほどの登山者が集まった。話している言葉がフランス語ばかりで不安を覚える。ロープウェイで Bellevue へ行き、ここから登山電車に乗り換えて Nidd' Aigle まで行く。線路の両側は白、黄、紫の美しい高山植物に覆われていた。

終点駅9時着で身支度を整え、いよいよ歩き始める。最初は雷鳥沢のようなガラガラの登りで、劔岳のような岩峰が立ち並んだ景色が続く。山を志す者一度はモンブランへ登ると言われるように、やはりモンブランの登山者は多く、所々に列ができる。下山する人も多い。ヘルマン・ブール（ナンガパルバットの初登頂者）のような顔をしたおっさんが、さかんに石を落としながら急ぎ足で降りていった。11時前に Tele Rousse 小屋を通過すると、いよいよ硬い雪と氷が現れる。ここから Gouter 小屋までの登りは、急な岩稜でそそり立っている。落石の集まるクーロワールをフランス人パーティが登り終わるのを待って、急ぎ足でトラバースする。それから急な岩稜となるが、難しいところは全くない。時差ボケのせい、高度が富士山を超え高山病の症状か体が重くなる。食料と自炊道具も入っているから荷物は重い。登れど登れど Gouter 小屋は近づかない。時々落石もあり、ハアハア喘ぎながら 14:40 に標高 4000m にある Gouter 小屋へ着いた。

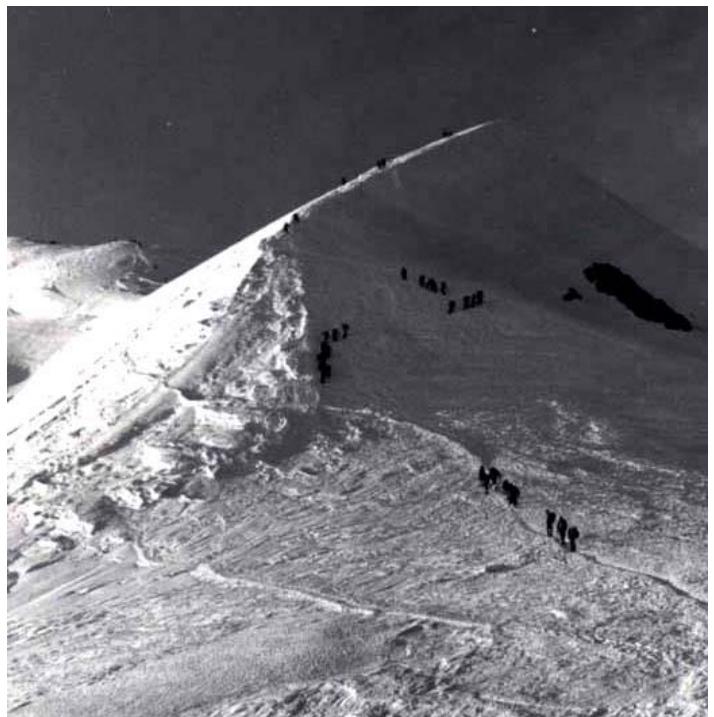
小屋は満員で、自炊組は床へ寝かされることになった。炊事室へ行って夕食を作る。フランス人たちはガスコンロで、僕の石油コンロはめずらしそうに見られた。お互いに手伝ったり手伝われたりで野菜炒めを作って食べる。夕暮れ、小屋の下に見えるミディ針峰群は、だんだんと夕方の赤い雲に染まって美しかった。

7月28日(月) 晴

夜中の1時半に一斉に起こされる。ほとんど寝る時間がなかったが高山病の症状はとれていた。皆いっせいに動き出すと、小屋はすごいごったがえしようである。いざ出かけよう！と思ったら大事なピッケルがない。かわりに同じ型の Shallet Moser が置いてあるから、誰か間違えたのだろうか、木のシャフトの模様が明らかに違うので暗くて間違えたようだ。運良く最初に追いついたフランス人のパーティが持っていたので、英語と身振り手振りで説明し交換してもらった。

外はもう明るくなってきた。早朝の締まった雪にアイゼンがキュッキュと効いて小気味よい。斜面を登りきると一面に広い雪原が広がった。スキー場がいくつもできる感じで、視界の悪い時には遭難しやすいところだ。

Dome du Gouter(4343m)のピークへ着く。今日の天気は抜群に良く、雲一つない。ジュアンやグランドジョラスが赤く染まっている。風もないのに猛烈に寒い。熱い毛糸の手袋を



モンブラン山頂（左奥）への道(4600m 付近)

通して手がカチカチする。足もつま先が凍えそうに冷たい。6時前に Vallot の小屋を過ぎると、山頂へ向けてだんだん急になってきた。頂上直下 200m は急な雪と氷のリッジで右がイタリア側、左がフランス側へ鋭角に落ちている。ここで落ちたらとても滑落停止はききそうにないのでピッケルでしっかり確保して進む。

7時45分、ついに 4807m のモンブラン山頂へ立った。山頂は思ったより広く、すでに 20 人くらい登頂者がいる。すばらしい眺めだ。マッターホルンからベルナーオーバーランドの山まで一望である。ここで近くにいたドイツ人 4 人パーティに写真を撮ってくれ、と頼んだら抱きついてこられた。あなたは同士だ！一緒に写真を撮ろうというのである。お互いに健闘を讃えながら写真を撮ってもらった。そしてさかんに 4 人から握手を求められた。ヨーロッパアルプスの最高峰、モンブランの登頂は誰も嬉しいのだ。

頂上は風がほとんどなく思ったほど寒くない。景色は抜群で食事をしながら 30 分ほどゆっくりした。そして往路を再び下った。途中に Bossons 氷河へ下るルートが分岐してトレールが付いていた。Tate Rousseu からは手頃な雪の斜面を 200m ほど一気に、美しくグリセードで下った。フランス人らしき太ったおじさんが、正面跳びのようなかっこうで尻セードしていたのは愉快だった。雪渓を下ると、あとは黄、紫、白の花いっぱい綺麗な道であった。13:45 に登山電車の駅に着き、下りのロープウェイではドイツ人のおじさんと一緒になり、英語で山の話をしてしながらほどなくシャモニー行きのバス停へ着いた。

7月29日（火）

この日は休養日。シャモニーの町を散策する。モーリス・エルゾーク市長（アンアプルナ初登頂者）以来近代化されたと言われるが、山の中にしては垢抜けた美しい町である。町はいたるところに赤や黄の花が咲いている。山の街らしく登山用品店が非常に多く、品数が豊富で安い。印象に残ったのはモンタンベール行電車の駅裏にある墓地で、非常にきれいなたたずまいであった。一つ一つの墓に花を植えて咲かせてあり、手入れが行き届いていた。憧れのウィンパー（マッターホルン初登頂者）とリオネル・テレイ（マカルー初登頂者）の墓を見つけてうれしかった。

キャンプ場に戻り、翌日のグランドジョラスへ出かける準備をする。洗濯したり、お向かいのイタリア人家族と談笑したり、町をとのんびり歩いたりして体の疲れを取った。

7月30日（水）

今日はいよいよ氷河を歩き、アルプス三大北壁のグランドジョラスへ行く日だ。登山電車に乗り、となりのカナダ人の兄さんと話しているうちに観光客で溢れるモンタンベールに着いた。ここから身支度を整えて歩き始め、10:05 ついにメール・ド・グラス氷河の上に立った。長い間夢見た氷河だ。胸が高なり、



レショ氷河より仰ぐグランドジョラス

目がジーンとしてきた。氷河は青く硬い。ピッケルを刺すと、氷がパッと飛び散る。

「氷河だ！氷河だ！」と人生はじめての体験に何度も換気の叫びをする。氷河の歩きは快適、風はひんやりと涼しい。クレバスはあるがヒドンクレバスはないので、うまく裂け目を回り込みながら登っていく。途中からはモンタンベールの人混みはうそのようで、氷河の見渡す限り誰もいない贅沢な空間となった。

レシヨ氷河に入り迷路のようなモレーンを越えると、グランドジョラスは目の前にそびえている。12時45分についてグランドジョラスの末端に到達しする。ここで我がピッケルを氷河に立て、記念撮影をして **Malboro** をゆっくり吸う。圧倒的な高度差のアルプス三大北壁を目の前に満足のひと時である。今日はハンマーの音もなく静寂している。北壁を眺めながらゆっくりと食事をし、もったいないが引き返した。振り返りながらつい感傷的になってしまう。15時30分にモンタンベールへ戻り、今日の行程は終わりだ。疲れたが、再びメール・ド・グラス氷河とグランドジョラスを振り返り、満足することができた。

明日は5日間滞在したシャモニーを離れ、マッターホルンの聳えるツエルマットへと向かう。
(つづく)